

# CALL 教室における スローラーナーへの大学英語リスニング指導

下山 幸成

## 要 旨

本稿では、2013年度に大学で行っている CALL 教室の様々な機能を活用したスローラーナーに対する英語リスニング指導法を報告する。この内容を他の指導者と共有・議論することで、より効果的なリスニング指導を考え実践する一助となることを願ってのことである。本稿におけるスローラーナーとは、本学入学と同時に行われたプレースメント・テストの結果、成績が芳しくなかった者を指す。筆者がこのような学生に対して行っている指導で重きを置いているのは、リスニング問題やリスニングテストの正誤結果ではなく、リスニングをするときの過程と方略、そして何よりも学習者が学習を続ける動機づけである。そのために、音声聞くだけでなく、聞くために必要な要素を身につける訓練内容を授業中に組み込んでいる。訓練として特に行っていることは、英語の個々の音、音と音の結びつき、リズム、イントネーションなどの音声面と、発話される内容が使われる場面や使われるときの気持ちといった状況面を意識した音読練習である。

## I 背景

リスニングのプロセスは複雑である。聞き手の頭の中では、音から語、文、話者の意図という方向のボトムアップ処理と、場面や話者の意図を推測することから文、語、音という方向で処理するトップダウン処理が行われている。音と語の間には、音のつながりを音素や語のつながりに分ける分節化の処理も必要である。さらに音声知覚の際には、音素を聞き逃したり別の音素として認知してしまう場合もある(白畑 他, 2011: 177-178)。このような複雑なプロセスの他に、学習者の能力が絡んでくる。学習者が英語の音に慣れておらず、語彙は乏しく、中学校で扱う基本的な文法力もきちんと備わっていない場合、リスニング指導は困難度を増す。

しかし、そのような学習者であっても、大学では最初からやり直して英語ができるようになりたいと願っている者は多い。本稿は、そのような学生に対して本学1年生の必修科目「基礎英語3」で行っているリスニング指導例を報告し、他の教員たちと共有・議論することで、より効果的なリスニング指導を目指すことを目的としている。

## II CALL 教室で使っている機能

本学の CALL 教室に備わっている機能を教員側操作と学習者側操作に分けて表1に示した。●印の付いているものが、本報告の授業で使っている機能である。

表 1 CALL 機能一覧

| 操作者          | 機能   | 機能の概要   |   |
|--------------|--|---|---|
| 教員側          | 出席管理   | 学習者の出席状況表示。結果の保存。(遅刻者対応)  |   |
|              | ●教材提示・転送   | 文字  | 提示する教材を選び、提示場所を指定できる。教員 PC 画面、ビデオや DVD などの動画などの視覚教材はスクリーン・学習者間モニタ・学習者 PC に提示。提示先ごとに別のものを提示することも可能。音声教材は、スピーカー・ヘッドセットを通して提示。 |
|              |  | 音声  |   |
|              |  | 画像  |   |
|              |  | 動画  |   |
|              | ファイル配付<br>一斉録音(ダビング)                                 | 文字  | 学習者 PC に教材ファイルを配布。<br>音声教材や動画教材をダビング(コピー)して配付。後に回収を前提とした課題も配付可。   |
|              |  | 音声  |   |
|              |  | 画像  |   |
|              |  | 動画  |   |
|              | ●ペアレッスン  | 学習者 2 人を相互通話可能状態に組み合わせ、会話練習を行う。ランダムにペアを組むことも可能。                                       |   |
|              | グループレッスン   | 3 人以上の学習者を相互通話可能状態に組み合わせ、会話練習を行う。ランダムにグループを組むことも可能。                                   |   |
|              | ●モニタリング  | 全体  | 特定の学習者、もしくはペア/グループ学習者の話し声や操作画面を教員側で観察する。全体的場合は、サムネイル(小さな分割画面)で学習者全員の PC 画面を一覧できる。   |
|              |  | グループ  |   |
|              |  | ペア  |   |
|              |  | 個人  |   |
|              | ●オートモニタリング   | 各学習者 PC の画面と音声を一定時間ごとに自動的に切り替えて観察する。  |   |
|              | ●インカム  | 教員からモニタリング中の学習者(もしくは学習者ペア/グループ)に個別にヘッドセットを通じて話しかける。インカムはインターコミュニケーションシステムまたはインターカムの略。 |   |
|              | ●コール&コールレスポンス  | 学習者からの呼び出しに対して、教員がヘッドセットを通じて個別に会話をする。   |   |
|              | オールコール   | 教員のマイクから学習者全員のヘッドセットに一斉に呼びかける。  |   |
|              | キーボードマウスロック  | 学習者 PC のキーボードとマウス操作を無効にする。  |   |
| 画面リモートコントロール | モニタリング中の学習者 PC を教師 PC で操作。                           |   |   |
| ブラックアウト      | 学習者 PC の画面を真っ黒にする。                                   |   |   |
| 学習者 PC 制御    | 学習者が使用できるソフトウェアを制御する。                                |   |   |
| モデル送信        | 選択した学習者(もしくは学習者ペア/グループ)の音声や画面を、その他の学習者に送信する。         |   |   |
| マーキング        | 送信映像やモニタリング中の学習者 PC 映像に文字や線などを書き込む。                  |   |   |
| ●アナライザー      | 教員が出題した選択問題やアンケートに対して学習者が回答を行い、その結果を集計・分析する。         |   |   |
| ファイル回収       | 学習者 PC から課題済みのファイルを回収。文書だけでなく音声などさまざまなファイルを扱うことができる。 |   |   |
| 学習者側         | ●出席登録  | 出席登録。出欠席の確認だけでなく、ファイル提出時のファイル名の一部にも使われる。  |   |
|              | ●教材選択  | サーバに保存された教材ファイルを選択。   |   |
|              | ●再生  | 音声や動画の個別再生。   |   |
|              | ●録音  | 音声の個別録音。ペアやグループが設定されているときはペアやグループの録音。教員へ提出もできる。3 つまで録音した音声を保持できる。                     |   |
|              | ●グループ・ペア通話   | グループ・ペア間の通話。  |   |
|              | ●コール   | 教員の呼び出し。  |   |
|              | ●課題提出  | 与えられた課題・作成した課題の提出。  |   |

機能の中で特にアナライザーは、学習者のその場での理解度、問題に解答した結果などを授業中に瞬時に把握するために使っており、学生の反応をみながら授業内容や説明をその場で微調整するには欠かせない。

### Ⅲ 学習者と使用テキスト

#### 1. 担当授業の学習者

指導例を報告する授業の学生は、クラス分けのために行ったプレースメント・テストで得点が一番低かったグループである。しかし、テストで得点が低かったからといって、英語学習の意欲が一番低いというわけではない。初回の授業では、学習者を知るために簡単なアンケートと診断テストを行う。アンケートでは、英語はできないが、できるようになれるならそうになりたいという願望を多かれ少なかれ持っているのわかる。診断テストの中では、ABC song を歌って音声録音して教員に提出するという方法を入れているのだが、摩擦音、破裂音、LMNOP の音の連続をきちんとすべて発音できる者はいない。また、簡単な例文のリスニングと英作文から、大多数が英語の音の認識力も語彙力も文法力も弱いとわかる。

#### 2. 担当授業の使用テキスト

該当授業の「基礎英語3 (リスニング)」では、共通テキスト *Basic TACTICS for Listening 3rd Edition* (Oxford University Press, 2010) を使うことになっている。1課の構成は、Getting Ready, Listening 1, Listening 2, Listening 3, Pronunciation, Dictation, Conversation から成っており、本授業で扱う必須部分は Getting Ready, Listening 1, Listening 2, Pronunciation である。しかし、筆者は Dictation 部分も扱うことにしている。それは、会話文でありペアでの練習がしやすいこと、その課で学習するポイントを押さえた内容になっていること、Pronunciation で扱う音に関する部分も含まれていることから、個人的には扱うのが適当だと考えるからである。

### Ⅳ リスニング指導で必要なこと

リスニング指導の目的は、各種試験でリスニングの選択肢問題が解けるようになることだけではない。リスニング授業がリスニングテストと答え合わせをするだけでは、(1)学習者に緊張をしいることになる、(2)学習者が聞き取れなかった原因が不明や曖昧のままで終わることが多く学習効果が薄い、(3)学習者がリスニング力を伸ばすための具体的な訓練方法を知らないで終わってしまう、という欠点がある (Field, 2009)。

また、リスニングは言語コミュニケーションを図るための必須技能であり、他の技能でも必要なものである。リーディングの理解過程では脳内で文字を音声化していることがワーキング・メモリの研究を通じてわかってきている (JACET SLA 研究会 2013: 208)。スピーキングではリスニングなくして相互のコミュニケーション活動はできない。ライティングでは音声を伴ってインプットされ内在化された文や表現を参考にしながら作成するという過程が必要である。

リスニング時の問題点として、単語レベルの処理がある。スローラーナーの場合、特徴として単語処理に問題がある場合が多い。Field (2009: 87) はリスニングにおける単語レベルの問題点に関して、少なくとも6つの原因があるとまとめている。

- ・ The learner does not know the word.
- ・ The learner knows the written form of the word but has not encountered the spoken form.
- ・ The learner confused the word with a phonologically similar one.
- ・ The learner knows the spoken form of the word but does not recognise it in connected speech generally or in this utterance in particular.
- ・ The learner recognised the spoken form of the word but failed to match it to any meaning.
- ・ The learner recognised the spoken form of the word but matched it to the wrong meaning.

授業中の解説や説明では、これらの特徴を踏まえた上で、学習者が納得して先に進めるよう配慮する必要がある。

リスニングの授業をデザインするに当たり、Matsusaka (1995: 60) は複雑な処理を考慮しつつ以下の2点が必要だと述べている。(下線部は筆者が加筆)

- (1) the learner is exposed to training both (the top-down processing and the bottom-up processing) in microlinguistic skill and global comprehension.
- (2) the two levels are incorporated into each other in the tasks, rather than be treated separately, so that interactive listening may be facilitated.

つまり、先に述べたボトムアップ処理とトップダウン処理を組み合わせ、効果的に相互を補完的に使うインタラクティブ・リスニングができるように配慮するということである。また、リスニングはまさに個別的な活動である (Field, 2009: 37) ことを踏まえると、インタラクティブ・リスニングの本身は学習者によって異なるため、一斉に解説をするだけの授業では効果が高まらないだろう。

音にこだわるだけでなく、学習訓練方法と動機づけも重要である。竹内 (2003) はよりよい学習法を求めて外国語学習成功者からの報告をまとめている。竹内は、18人の「英語の達人」にインタビューし、各自の学習方略や学習過程を語ってもらった内容をまとめている。ここでいう「英語の達人」の定義として、日本で生まれ、12歳以降に本格的な英語学習を始め、主として日本で英語を学び、家庭環境で英語を日常的に使用することはなかったが、現在は英語を使う仕事をし、その英語能力がきわめて高く、ETLL<sup>(1)</sup>的要素はない、という7条件を挙げている。まとめた結果によれば、多くの達人たちが語った方略は学習の初期に英語の音や韻律 (リズム、イントネーション) を集中して聞き、若干の相違があるとはいえ、手順は以下のとおりであったとのことである。(竹内, 2003: 126)。

- (1) モデルとなる音・韻律を繰り返し聞く
- (2) 自ら発音してモデルの音・韻律に近づける努力をする
- (3) 自らの発音を録音し、正しい音・韻律になっているかどうかをチェックする
- (4) 正しくなければ矯正する

続けて竹内は、多くの被験者がとった手順を以下のようにまとめている (ibid: 126-127)。

インプットを入れるだけではなく、インプットとアウトプットをマッチングする努力をおこなっている、というところに特徴があるようだ。(中略)なお、モデルの音に近づけるためには、音声学的な分析の知識が役立ったと指摘する被験者が複数おり、彼らは、口の構え・舌の動かし

方、ストレス (Stress) と音の長さの関係 (たとえば、ストレスがあるところは長く発音する)、複合語のアクセントのつけ方(たとえば、GREENhouse と GreenHOUSE)などを意識して学び、繰り返し練習し、身につけていくことが大切であると指摘している。

(2)はモデル音声をよく聞き、聞くだけでなく発音練習することを意味する。(3)は練習成果がどの程度なのかを客観的に捉える行為である。自分で自分の録音した音声を聞き、自分でモニタリングをするという、メタ認知の作業である。(4)は学生だけではできない場合が多く、教員からのアドバイスが必要であろう。そして教員には、的確なアドバイスをするために該当学生の日本語の口の動きのパターンを認識し、それを矯正するための英語音声学の知識があることが望ましいといえる。

このように考えると、リスニング中心の授業であっても(1)だけでは不十分で、他の3技能と組み合わせる学習することが重要であると伝え、個々の音のようなボトムアップ処理と背景知識のようなトップダウン処理の方法を伝え、訓練によって初めて身につくことだと実感させ、授業内に学習訓練方法を伝えて訓練しながら自学自習時の訓練を促し、それと同時に英語学習動機を維持するような指導をできることが望ましいといえる。

## V 授業内容

以上のリスニング指導で必要なことを踏まえ、CALL 教室での機能、学生特性および使用テキスト内容を考慮した上で、1コマ(90分)の授業の基本的な授業展開パターンを表2のように設定している。

表2 授業展開の基本パターン

|    | 時間  | 内容            | 学生の活動   | 教師の活動  |
|----|-----|---------------|---|--|
| 1. | 5分  | タイピング練習       | ・ウェブサイトの e-typing でタイピング練習  | ・教員 PC および CALL システムの起動  |
| 2. | 10分 | Quizlet       | ・PC またはスマートフォンを用いて『TOGAKU 英単 2000』のウェブサイトの Quizlet で学習する  | ・出席票の配付<br>・机間巡視・指導  |
| 3. | 10分 | 前回の復習         | ・前回扱った Dictation 部分をペアワークで復習する。<br>1. 立って向かい合いながら音読練習を行う。<br>2. CALL システムのランダムペア機能を使って音読練習を行う。                            | 以下、どれかを選択<br>ペアワークを録音提出<br>出席票を使って小テスト                               |
| 4. | 5分  | 新しい課の導入       | ・Getting Ready を行いながら課の話題のウォーミングアップ   | ・その日に新規で扱う課の内容スキーマを与え、学生に活性化させる。                                     |
| 5. | 10分 | 新しい課の問題への取り組み | ・Dictation → Listening → Listening 2 を各自で行う。その際、各問いごとに○×△の印をつける。<br>・終わった者からスクリプトで内容確認。<br>・音声変化が起こっていて注意すべきと感じた部分に下線を引く。 | ・Listening 2 まで終わった学生から Dictation、Listening 1、Listening 2 のスクリプトを渡す。 |

|    |     |                          |  |  |
|----|-----|--------------------------|--|--|
| 6. | 10分 | 答え合わせ (Dictation) と発音練習  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・注意すべき音声変化の部分に下線を引く。</li> <li>・教員の指示に従い、発音練習を行う。</li> <li>・各自の必要に応じてメモを取る。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・各文ごとに読んでから解説。</li> <li>・意味、音の崩れ、リズム、イントネーションなどを説明し、必要があれば随時 Repeat after me. で発音練習をさせる。</li> <li>・Pronunciation 部分も同時に解説し、発音練習もさせる。</li> </ul> |
| 7. | 25分 | 答えあわせ (Lis. 1 & 2) と発音練習 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・注意すべき音声変化の部分に下線を引く。</li> <li>・教員の指示に従い、発音練習を行う。</li> <li>・各自の必要に応じてメモを取る。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・Listening 1 は答え合わせをするだけでなく、1文ずつ解説。モデル音読をしながら発音練習もさせる。</li> <li>・内容、音声変化などの質問を受け付ける。</li> <li>・Listening 2 は答え合わせのみ。</li> </ul>                 |
| 8. | 5分  | 今回のまとめと次回の Getting Ready | <ul style="list-style-type: none"> <li>・次回に扱う課の内容を知る。</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・次回授業で扱う部分の content schema を活性化させる</li> </ul>   |
| 9. | 10分 | Dictation 部分録音提出と出席票記入   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・今回新規で扱った Dictation 部分を音読録音し、提出。</li> <li>・出席票のコメント欄に今日の授業で学んだことを書いて提出。</li> </ul>    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・音声提出ファイルのフォーマット確認と出席票の受け取り</li> </ul>  |

基本的な展開パターンを考える際に意識したのは、1. 飽きさせない、2. 各活動を集中力を高めて行わせる、3. 随所で達成感を感じさせる、4. 力の伸びを実感させる場面を設ける、の4点である。

指導の際には、リスニングを阻害している要因として挙げられている困難点（柳井，1984）を踏まえ、日本人の口の動き方を前提とした場合の英語発音訓練（松坂，1986；東後，1989；田辺，2003）を行うとともに、学習ストラテジーとメタ認知（尾関，2010）を活発に使えるようになることを常に意識して行っている。特に、Goh (2008) が提唱しているメタ認知活動を取り入れている。低次の処理の強化に重きを置きながら、一般的な聞き手の心的プロセスを聞き手である学生自身にも分析させたり評価させたりすることで、自己評価・自己統制につなげることを意図してである。以下、指導法の詳細を表1に記載した順に解説する。

### 1. タイピング練習

タイピング練習自体はリスニング指導と特別な関係はない。CALL 教室のシステムを起動するには数分間の時間がかかるので、その時間を無駄にしないように取り組ませている活動である。しかし、学習者が指を動かして活動することは授業を受けるためのよいウォーミングアップになると同時に、学習者の集中力を高めることができると考えている。ウェブサイトの e-typing (<http://www.e-typing.ne.jp/>) を使っているが、その理由としてタイピングのレベルが細かく表示されるために上達がわかりやすいこと、授業外・校外でも同じサイトにアクセスして練習できることが挙げられる。

この間に、筆者専用の出席票も各自に配る。2種類のタイプがあり、1つはアンケートを行う場合に配付するもの（図1）であり、もう1つは小テストを行う場合に配付するもの（図2）である。

| 出席票(下山担当授業)                       |    |                |   |   |   |     |
|-----------------------------------|----|----------------|---|---|---|-----|
| 学籍番号                              |    | 氏名             |   |   |   |     |
| 曜日                                | 時限 | 年 月 日          |   |   |   |     |
| e-typing レベル:                     |    | 良くわかる←→全くわからない |   |   |   |     |
| 1.                                |    | 6              | 5 | 4 | 3 | 2 1 |
| 2.                                |    | 6              | 5 | 4 | 3 | 2 1 |
| 3.                                |    | 6              | 5 | 4 | 3 | 2 1 |
| 4.                                |    | 6              | 5 | 4 | 3 | 2 1 |
| 5.                                |    | 6              | 5 | 4 | 3 | 2 1 |
| コメント欄(今日の授業でわからなかったこと、学んだこと、質問など) |    |                |   |   |   |     |

図 1 出席票(1)

| 出席票+小テスト(下山担当授業)                  |  |    |    |       |  |  |
|-----------------------------------|--|----|----|-------|--|--|
| 学籍番号                              |  | 氏名 |    |       |  |  |
| e-typing レベル:                     |  | 曜日 | 時限 | 年 月 日 |  |  |
| 1.                                |  |    |    |       |  |  |
| 2.                                |  |    |    |       |  |  |
| 3.                                |  |    |    |       |  |  |
| コメント欄(今日の授業でわからなかったこと、学んだこと、質問など) |  |    |    |       |  |  |

図 2 出席票(2)

出席票(1)を使って尋ねる内容は様々である。文法事項を扱う前の理解度と説明後の理解度、復習の有無、English Lounge への参加の有無、その授業で扱った内容の理解度、その授業で扱った訓練内容の達成感、などさまざまである。授業の途中に書いてもらう場合もあれば授業の最後に書いてもらう場合もある。出席票(2)は、小テストがあるということを示す。テストは、事前に伝えてあるときもあれば、抜き打ちのときもある。内容は、既学習事項で覚えてほしいと事前に伝えてある内容や、文法力を確認するための基本的な英作文である。コメント欄は授業後に必ず書いてもらう(後述)。

## 2. Quizlet

タイピングを1, 2回行った後、「基礎英語3(リスニング)」担当者が成績の5%に組み込むことになっている Quizlet (<http://quizlet.com/>) に取り組む時間を設けている。本学の学生用に作成している『TOGAKU 英単2000』の内容を無料で使えるウェブサイトに登録し、単語学習ができるようにしたものである。学習の際、必ず音声を確認しながら行うように指示している。間違った発音を正しいと思い込んだまま覚えていると、語学ではリスニングだけでなく学習の妨げになる。

この時間の練習は、PCだけでなくスマートフォンの利用も許可している。PCよりもスマートフォンでの学習活動の方がやりやすいという学生もいるからである。現在、iPhone用のアプリ(図3)も Android用のアプリ(図4)も無料でダウンロードが可能である。機能としては、音声の確認もできるフラッシュカード、日本語訳を見ながら英単語を打ち込む学習、日本語訳と英単語の組み合わせを次々に選んで消していくマッピングゲームがある。特に最後のゲームは時間を測定してくれるため、語とその意味を結びつける処理時間を短くする訓練として有効である。

Quizletの時間は、教員PCでその日に扱う音声ファイルを開きすぐに再生できるように準備することと、机間巡視をしながら学生の進度や体調などを観察する時間に当てている。



図 3 iPhone 用の Quizlet 画面



図 4 Android 用の Quizlet 画面

### 3. 前回の復習

e-typing と Quizlet が終わってから、前回の最後に音読録音してファイル提出した Dictation 部分を使ってペア・ワークを行う。声をきちんと出して練習する必要があることから、立って少し距離をとった位置で行う(図 5)。筆者が前回学生から提出してもらった音声ファイルを聞いて指摘すべき改善点がある場合は、その内容を伝えてから行う。この立ち音読は行う場合と行わない場合があるが、CALL システムを使ってランダムにペアを組ませた音読練習は必ず行う。時にはペアで組ませた相手とのペア・ワークを録音して提出させることもある。録音提出があるかもしれないということで、きちんと練習してもらうことを狙っている。また、この時間帯で前回覚えるように伝えた表現を書かせる小テストを加える場合もある。





図 5 CALL 教室での立ち音読

#### 4. 新しい課の導入

前回やっておいた Getting Ready の復習をしながら、その日に扱う課の概要と目標を伝える。例えばその課のタイトルが Prices であれば、円とドルの数字の読み方だけでなく、その課で扱っている品物が日常生活でいくらくらいの値段だと思えるか、またその品物をドルに換算するといくらになるか等の話をしながら、新しい課の内容を日常生活の場面とリンクさせる。

#### 5. 新しい課の問題への取り組み

この部分の10分間は各自の個別学習となる。Dictation で空所の下線部を聞き取り教科書に書き込む→ Listening 1 の部分を聞いて問題を解く→ Listening 2 の部分を聞いて問題を解く、の順である。2回聞いてわからない場合は先に進むように伝えている。10分という時間制限がある中での活動であり、その2回に集中力を高めて課題に取り組んでもらいたいからである。

Dictation で単語の綴りがわからない場合は、カタカナでも間違った綴りでもよからとりあえず書いておくよう指導している。しかし、答え合わせをした後は、カタカナを読まないように伝えている。カタカナを使うというのはスローラーナーに見られる特徴のひとつだが、聞いた英語の音声すべて日本語の類似音として置き換えてしまうと、リスニングの妨げとなる。例えば hurt と heart は同じ「ハート」になってしまう。

Listening 1 と Listening 2 の部分は、問題を解きながら問題番号の左に○か×か△の記号をいれておくよう指導している。○は自信を持って解答したもの、△は自信がなく解答したもの、×はわからなかったものという記号である。解いているときに×をつけていれば、その問題はどのようにわからなかったのか、何が聞き取れればわかったのかを考えながら解説を聞いたり答え合わせをすることにな

る。△であれば、どうして解答に自信がなかったのかを考えながら解説を聞いたり答え合わせをすることになる。○であれば、自信を持って解答した自分の根拠と解答するためのポイントが一致しているかを確かめながら答え合わせをすることになる。○をつけて誤答を選んでいった場合、ちょっとした勘違いであればよいが、誤った知識が原因の場合は注意が必要となる。すでに身につけてしまった誤った知識をきちんと壊した上で新たに正しい知識を入れないと、別の場面で同じ誤りを再度繰り返すことになる。このように各設問ごとに変化をつけて学習することで、自分自身の学習を自己モニタリングする癖をつけてもらおうというのが狙いである。Listening 2 まで終わった者は、教員を呼び、Dictation, Listening 1, Listening 2 のスクリプトを受け取り、各自で答えを確認する。また、音声変化が起こっていて注意すべきと感じた部分に各自で下線を引く作業も行う。

## 6. 答え合わせ (Dictation) と発音練習

活動時間の10分が過ぎたら、まだスクリプトを渡していなかった学生にも渡し、Dictation から解説を始める。ここは会話文であり、その課でポイントとなる内容や表現が詰まっているので、音声指導も含めて丁寧に行う。先に CD 音声と同じように似せた発音で筆者が読み、次に個々の単語がはっきりと聞き取れるような発音で読み、最後に学生に発音してもらいたいような発音で読み、Repeat after me. で学生に発音させる。意味と強弱、リズム、音変化のポイントを伝え、もう一度 Repeat after me. で繰り返させる。この作業を1文ずつ行う。音変化がわかりにくい部分は、実際に CD 音声で聞かせ、どうしてそのような音変化が起こるかを明示的に説明するとともに、その音声を10回連続で聞かせたりする。このときに便利なのが、音声編集ソフトである。使っているのは GoldWave (図 6) というシェアウェアで、このソフトは再生ボタンが3箇所あり、それぞれのボタンにあらかじめ再生方法を割り当てておくことができる。繰り返し再生したい部分を選択してリピート再生10回と設定してあるボタンをクリックするだけで、同じ部分を10回再生してくれる。音変化の部分はポイントを絞って説明した後に連続して再生することで、英語の音に慣れることが期待できる。Dictation 部分は授業の最後に音読録音提出をするため、音読の練習が特に大切だということをすでに学生はわかっている、きちんと練習している。

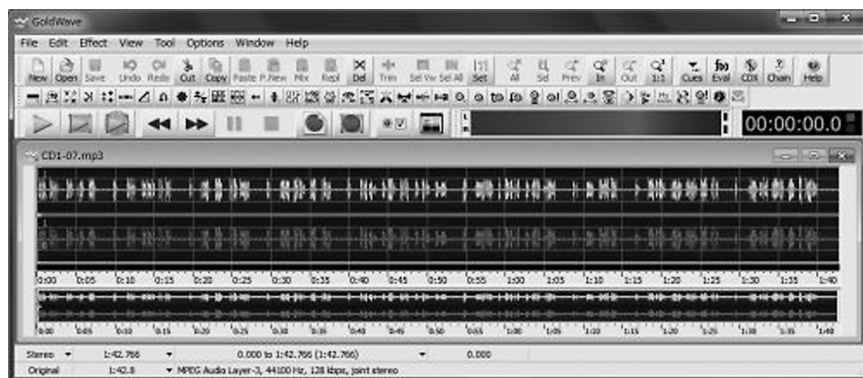


図 6 音声編集ソフト GoldWave の画面

Dictation の中に特に練習するに値すると思われる音と音のつながりが含まれている文がある場合は、次節で後述するように1文ずつの音読録音を提出してもらい、その場で確認するとともに学生へのフィードバックを行う。

## 7. 答えあわせ (Lis. 1 & 2) と発音練習

Listening 1 の答えあわせは、アナライザーを活用しながら行う。1問ごとに解説するのだが、解説の前に学生には解答として何番を選んだかをアナライザーで示してもらい、アナライザーを使うと、誰が何番を選択したか、また正解者が何名であったかなど、瞬時にわかる。その結果を見ながら、解説にも強弱をつけていく。正解を選んでいる者が少なければ、なぜ正解を選択できなかったのかという理由を明示する。解答が割れていれば、正解者と誤答者の違いはどこを聞き取ることがポイントであったかを明示する。アナライザーは、その場で簡単に行ってすぐに集計できる便利なツールである。結果を保存しておきたい場合は、簡単に CSV ファイルとして出力することができる。

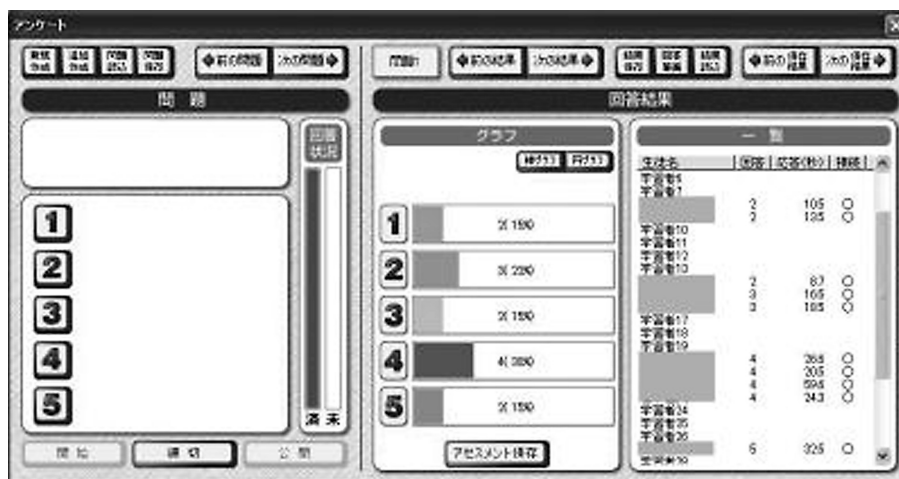


図7 アナライザー集計画面

次に、1文を見て心の中で発音させ、その後に筆者が発音し、発音方法の違い（または同じであること）に気づかせる。すでに各自が気づき注意すべきだと判断した音声変化の部分は下線部を引いていることになっているが、その確認をする時間でもある。まだ下線を引いていなかった、あるいは下線を引くべきだということに気づかなかった学生には、スクリプトに下線を引かせる。

解説時、英単語の綴りを示すときを除き、ほとんど板書はしない。メモを取る内容は各学生のレベルに応じて変わるのが当然だという考えとメモを取る訓練が必要だという考えから、原則としてメモ内容は各学生に任せている。ただ、解説時は机間巡視をしながら行うので、まったくメモを取らない学生がいた場合はメモを取るように促す。

Listening 2 の部分は、スクリプトを使って重要な表現を指摘し、正解を伝える。アナライザーを活用しながら行うが、すでに Listening 1 で解説済の内容が多いのでそれほど丁寧には解説しない。

Dictation, Listening 1, Listening 2 の中に練習するに値する音と音のつながりが入っている場合は、1文ずつの音読録音を提出してもらおう。筆者は提出されたファイルが入ったフォルダを教員 PC で開き、その PC 画面を学生間モニタにも映し出す。それから音声ファイルの提出順に音声を聞き、ファイル名の最初に○×◎の文字を打ち込む(図8)。○は合格、×は不合格で録音提出のやり直し、◎はとてもよいと判断できる合格である。この活動で、×を2回つけた者には、どうすれば○になるかを CALL 機能のインカムを使って説明する。1コマの中でこの時間が教員にとって一番忙しい時間であるが、授業内に行うアンケートの結果から判断すると、この活動の評価が高い。

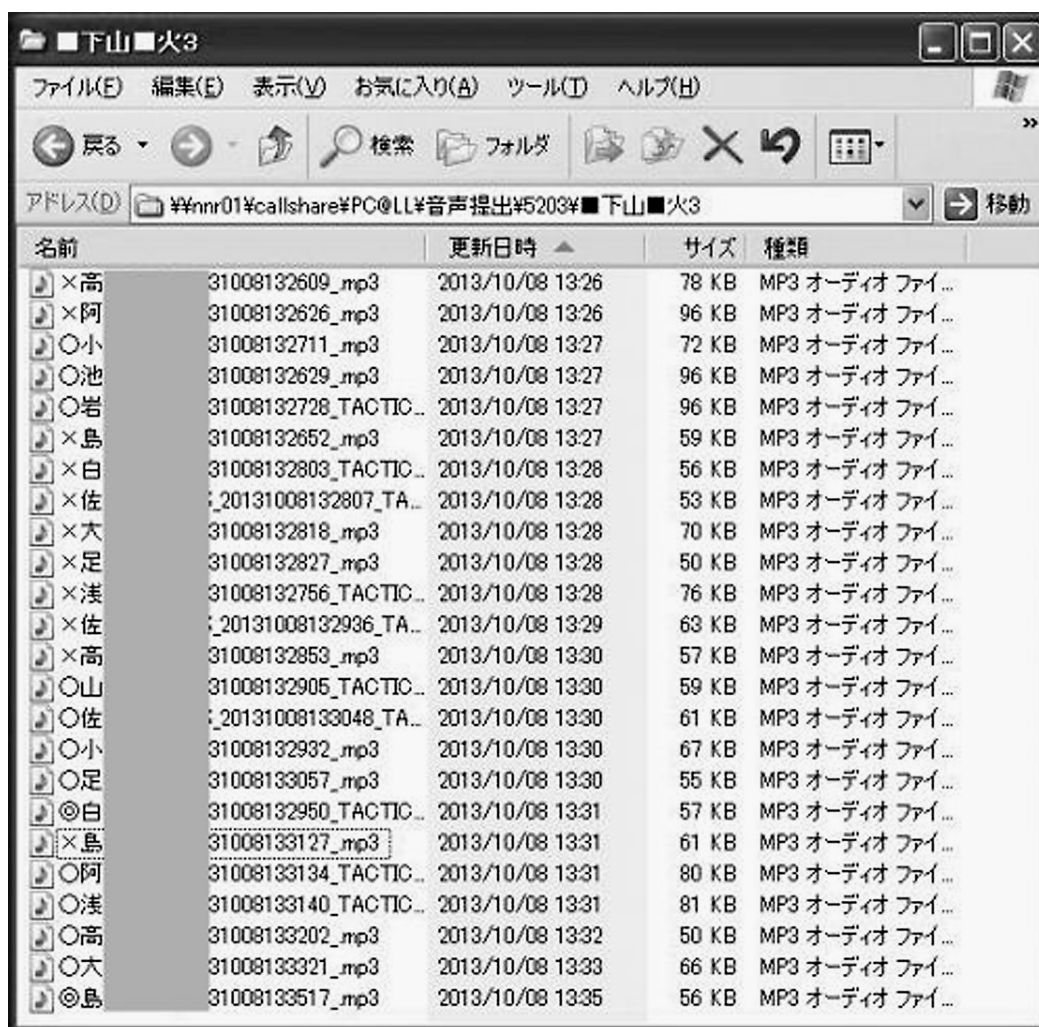


図8 音声提出ファイルのチェック

## 8. 今回のまとめと次回の Getting Ready

授業の残り時間が15分になったところに、今回の課のポイントを再度説明し意識させる。また、次の授業で扱う課の Getting Ready (導入部分) を扱う。次回はこんな内容を扱いますよということを知

らせる程度であるが、あえて授業の1週間前に言うておくのは、次の授業までの1週間、その話題が日本語でどのように使われているかを実際の生活の中で観察してほしいからである。

### 9. Dictation 部分録音提出と出席票記入

授業時間最後の10分で、その日に扱った Dictation 部分を CALL システムで録音して提出する。すでに「6. 答え合わせ (Dictation) と発音練習」で示したように内容理解と音読練習は済んでいて、録音時間は1分ほどであるため、それほど時間はかからない。しかし、必ず1回は自分で録音したものを聞いてから音声ファイルを提出するように指示を出している。これは、自分の録音したものを聞くことによって自己分析の機会を与えることを狙っている。満足できなければ再度録音し、自分でよりよいと思う方のファイルを提出する。利用している CALL システムでは録音を3つ保持できるようになっているが、この機能が役立っている。また、録音時には声量と強弱にも気をつけるように指導している。具体的には、録音している波形がちょうどよい大きさになる程度であり、波形の大きい部分と小さい部分が交互に現れるように録音するということである。録音中に波形を使えるメリットは、学生自分の音読がリズムよくできているかをモデル音声と比べながら可視化できる点にある(図9)。音声ファイルが提出できていることを教師 PC 画面を映し出している学生間モニタで確認できたら、出席票を記入する。

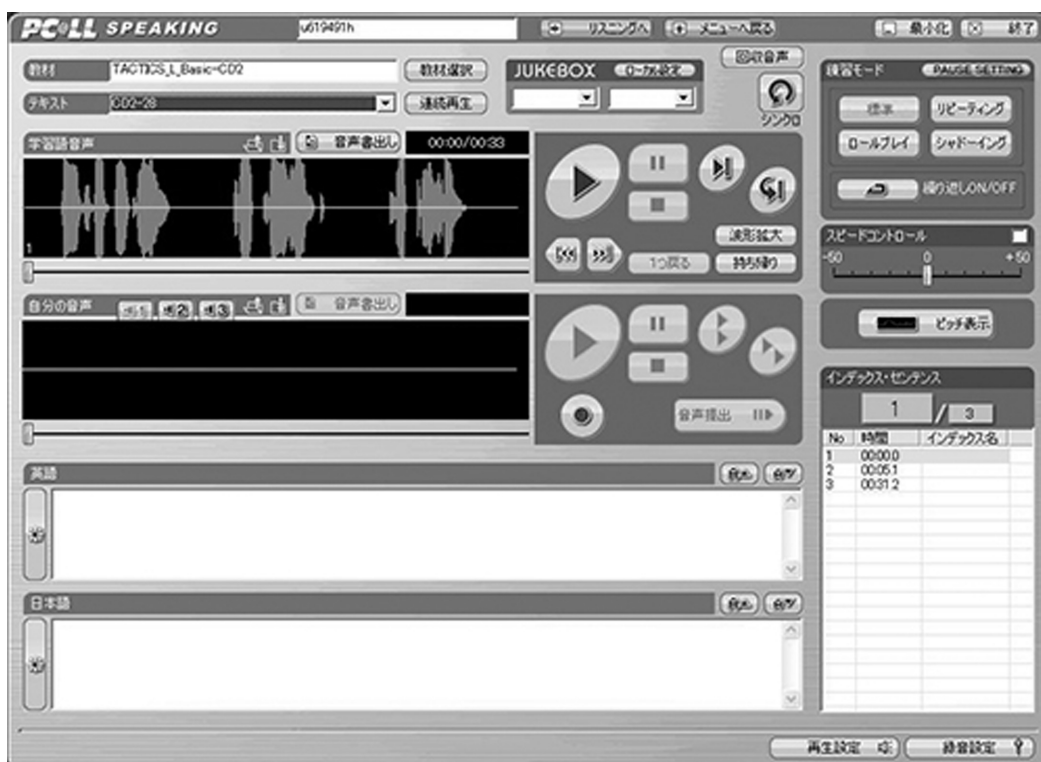


図9 録音画面

出席票は、図 1, 2 で示したように 2 種類あるが、下部のコメント欄は共通である。ここには必ずその授業内のことについて具体的に何かを書くことになっている。書き終わったら筆者に手渡しをして教室から退出するのだが、コメント欄を見ながら交わす一言も指導のひとつとして位置づけている。理解できた内容を書いてきた者には理解できてよかったねと声をかけ、わからなかった内容を書いてきた者には来週説明すると伝えたりその場で追加の説明をしたりする。

授業後に提出された音声ファイルを聞くことと出席票をみることで、その授業のフィードバックを学生からもらうことになる。その内容を踏まえて、次回の授業の内容を微調整する。

## VI まとめ

本稿では、大学に入って最初に行われる英語プレースメント・テストで下位グループに入った学生を指導している内容を報告した。授業で意識的に行っているのは、1. 飽きさせない、2. 集中力を高めて各活動を行わせる、3. 随所で達成感を感じさせる、4. 力の伸びを感じさせる、ことである。また、指導のポイントは、自分の学習を自分で分析する癖をつけ、効果的に自学自習できる方法を習得させることである。授業時間は限られており、それだけで本当にリスニング力をつけることはとても難しい。しかし、効果的に自学自習できるようになれば、授業時間外の学習やトレーニングが大きな意味を持つことだろう。

今回報告した指導がどれほど学生のリスニング力向上に貢献しているかをデータとして示すことはまだできない。しかし、4 月当初に行った音読録音と後期に入って行った音読録音を比べてみると、明らかにその差は出ており、音と音の自然なつながり、強弱のリズムの点でとても上手になったと言っただろう。4 月に行った TOEIC Bridge テストと 12 月に行う TOEIC Bridge テストのリスニング部分のデータ比較や、学年初めと学年終わりのアンケート結果の比較は、別の機会に報告したいと考えている。

本稿で報告した CALL 教室を活用した指導法は、さらに改善する余地があるかもしれない。他の英語教員と共有し、さらに意見交換をすることで、よりよいリスニング指導を考え実践する一助になれば幸いである。

**注**

- (1) ETLT: Exceptionally Talented Language Learner「例外的な高度外国語学習能力保持者」と呼ばれる一群の学習者たちのことを指し、大人の全人口の中で5%程度の割合で出現するといわれている(竹内, 2003: 39)。

**参考文献**

- Field, J. (2009). *Listening in the language classroom*. Cambridge University Press.
- Goh, C. (2008). Metacognitive instruction for second language listening development: Theory, practice, and research implications. *RELC Journal*, 39, 188-213.
- Matsusaka, H. (1995). Listening comprehension: the phonetic factor. *Gakujutsu Kenkyu*, 43, 51-61. The Graduate School of Education of Waseda University: Tokyo.
- 尾関直子 (2010) 「第4章 学習ストラテジーとメタ認知」大学英語教育学会監修 小嶋英夫・尾関直子・廣森友人(編)『英語教育学大系第6巻 成長する英語学習者』大修館書店, 75-103.
- 白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則 (2011) 『改訂版 英語教育用語辞典』大修館書店.
- 竹内理 (2003) 『よりよい外国語学習法を求めて』松柏社.
- 田辺洋二 (2003) 『これからの学校英語』早稲田大学出版部.
- 東後勝明 (1989) 『日本人に共通する英語発音の弱点』ジャパンタイムズ.
- 松坂ヒロシ (1986) 『英語音声学入門』研究社.
- 柳井智彦 (1984) 「第2章 指導の原理 III. 困難点の分析」吉田一衛(監修) (1984) 『英語教育学モノグラフ・シリーズ 英語のリスニング』大修館書店, 74-96.

